

由布市

しょう じ  
小 路 遺 跡

— 上小原地区急傾斜地対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2023

大分県立埋蔵文化財センター



しょう じ  
小 路 遺 跡

— 上小原地区急傾斜地対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



## 序 文

本書は、大分県立埋蔵文化財センターが大分県土木建築部大分土木事務所の依頼を受けて実施した、上小原地区急傾斜地対策工事に伴う小路遺跡の発掘調査報告書です。

小路遺跡は大分川左岸の河岸段丘上に立地する遺跡で、現在段丘面は住宅地として利用されています。調査地は清源山大應寺の境内地で、本堂後背の段丘崖には大友氏時の墓とされる「大應寺の無縫塔」を中心に、数多くの石塔が建立されています。

今回の調査では、これら石塔を納めた龕の発掘調査を行いました。その結果、龕床面に穿たれた埋納穴からは焼骨を納めた近世の蔵骨器が出土し、これらの龕がお墓であることを確認することができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

令和5年3月

大分県立埋蔵文化財センター

所長 松本昌浩

## 例 言

- 1 本書は由布市庄内町庄内原に所在する小路遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、上小原地区急傾斜地対策工事に伴い、大分土木事務所から依頼を受けた大分県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は令和3年度、整理作業は令和4年度に実施した。
- 4 現地での諸業務（遺構実測、遺物実測、写真撮影、作業員管理）は、委託した株式会社島田組大分営業所が行った。
- 5 出土遺物のうち第33回-15～20は大應寺において、その他は大分県立埋蔵文化財センターにおいて管理している。図面・写真等は大分県立埋蔵文化財センターにおいて管理している。
- 6 本書で使用する方位は世界測地系による。
- 7 第1図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図（小野屋）を複製したものである。
- 8 本書の執筆・編集は小堀嵩史が行った。

# 本文目次

第1章 調査に至る経緯と発掘調査・整理作業の経過・調査組織の構成	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の経過	1
(1) 過去の調査	1
(2) 今回の調査	2
3. 調査組織の構成	2
(1) 令和3年度 本調査	2
(2) 令和4年度 資料整理・報告書作成	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第3章 遺跡の現状	5
1. 小路遺跡の位置	5
2. 遺構分布の特徴	5
第4章 区域1の調査	8
1. 竈の調査	8
(1) S 1	8
(2) S 2	10
(3) S 7	11
(4) S 8	11
(5) S 9	12
(6) S 10	12
(7) S 11	12
2. 前庭部の調査	13
(1) 調査区の設定	13
(2) 表土層の様相	13
(3) トレンチによる調査	13
(4) トレンチ調査により検出された遺構の様相	18
3. 区域1出土遺物	19
第5章 区域2の調査	23
1. 調査の所見	23
(1) S 3	23
(2) S 4	24
(3) S 5	24
(4) S 6	24
2. 区域2出土遺物	25
第6章 総括	27

## 図版 目次

図版 1	1	小路遺跡遠景	31	図版 7	1	S 4-A 骨管出土状況	37
	2	小路遺跡近景	31		2	S 4-A 完掘状況	37
図版 2	1	区域 1 遠景	32		3	S 5 調査前	37
	2	S 1 調査前	32		4	S 5-A・B 骨管出土状況(竹串の先端に骨片)	37
	3	S 1 調査後	32		5	S 5-B 遺物出土状況	37
	4	S 1 東壁土層	32		6	S 5-C 遺物出土状況	37
	5	S 1 区画石に刻まれた図像(地蔵菩薩小)	32		7	区域 2 その他石造物(西國福路供養塔)	37
図版 3	1	S 2 調査前	33		8	区域 2 その他石造物(五輪塔火輪)	37
	2	S 2 調査後	33	図版 8	1	第 23 図-1	38
	3	S 2 西壁土層	33		2	第 24 図-2	38
	4	S 2 塩化ビニールパイプ出土状況	33		3	第 25 図-3	38
	5	S 7 調査前	33		4	第 25 図-4	38
	6	石塔 4 抜取痕	33		5	第 26 図-5	38
	7	S 7 調査後	33		6	第 26 図-6	38
	8	S 8 調査後	33		7	第 26 図-7	38
					8	第 26 図-8	38
図版 4	1	区域 1 前庭部(調査後)	34		9	第 27 図-9	38
	2	区域 1 前庭部東壁土層	34		10	第 28 図-10	38
	3	区域 1 前庭部西壁土層	34	図版 9	1	第 28 図-10	39
	4	S 1 トレンチ全景	34		2	第 28 図-10	39
	5	S 1 トレンチ西壁土層(北半部)	34		3	第 28 図-11	39
図版 5	1	S 1 トレンチ西壁土層(南半部)	35		4	第 28 図-11	39
	2	S 1 トレンチ溝状遺構(東から)	35		5	第 29 図-12	39
	3	S 2 トレンチ全景	35		6	第 29 図-13	39
	4	S 2 トレンチ西壁土層	35		7	第 33 図-14	39
	5	S 7 トレンチ全景	35		8	第 33 図-15・16	39
	6	S 7 トレンチ西壁土層	35		9	第 33 図-17・18	39
	7	S 8 トレンチ全景	35		10	第 33 図-19・20	39
	8	S 8 トレンチ西壁土層	35				
図版 6	1	区域 2 遠景	36				
	2	S 3 調査前	36				
	3	S 3-A(左)・B(右)遺物出土状況	36				
	4	S 3-C 遺物出土状況	36				
	5	S 4 調査前	36				

## 挿図 目次

第 1 図	小路遺跡と周辺の遺跡	3	第 18 図	S 7 トレンチ・S 8 トレンチ土層断面図	17
第 2 図	大徳寺平面図	5	第 19 図	S 13 遺物出土状況	18
第 3 図	区域 1 測量図	7	第 20 図	S 14 遺物出土状況	18
第 4 図	区域 2 測量図	7	第 21 図	S 13 遺構実測図(1/10)	18
第 5 図	S 1 遺構実測図および土層断面図	8	第 22 図	S 14 遺構実測図(1/10)	18
第 6 図	石塔 2 実測図	9	第 23 図	S 8 出土遺物	20
第 7 図	石塔 3 実測図	9	第 24 図	前庭部表土出土遺物	20
第 8 図	S 2 遺構実測図および土層断面図	10	第 25 図	S 7 トレンチ出土遺物(1)	20
第 9 図	石塔 1 実測図	10	第 26 図	S 7 トレンチ出土遺物(2)	21
第 10 図	石塔 4 実測図	11	第 27 図	S 13 出土遺物	22
第 11 図	S 9・S 10・S 11 の現状(南西から)	12	第 28 図	S 14 出土遺物	22
第 12 図	S 9 完掘状況	12	第 29 図	その他の遺物	22
第 13 図	S 10 半截状況	12	第 30 図	S 3 遺構実測図	23
第 14 図	S 11 半截状況	12	第 31 図	S 4 遺構実測図	24
第 15 図	区域 1 前庭部トレンチ配置図	13	第 32 図	S 5 遺構実測図	25
第 16 図	区域 1 前庭部東壁土層断面図・西壁土層断面図	15	第 33 図	区域 2 出土遺物実測図	26
第 17 図	S 1 トレンチ・S 2 トレンチ土層断面図	16			

## 表 目次

第 1 表	区域 1 出土遺物一覧表(1)	19
第 2 表	区域 1 出土遺物一覧表(2)	19
第 3 表	区域 1 出土遺物一覧表(3)	19
第 4 表	区域 2 出土遺物一覧表(1)	25
第 5 表	区域 2 出土遺物一覧表(2)	25



# 第1章 調査に至る経緯と発掘調査・整理事業の経過・調査組織の構成

## 1. 調査に至る経緯

古墳時代の横穴墓があることから埋蔵文化財包蔵地として周知されていた小路遺跡は、由布市庄内町上小原に位置する。そこは大分川の左岸、河岸段丘上にあたり、段丘面は住宅地として利用され、その後背にある角度の急な凝灰岩崖面には、横穴墓や中世の竈が開削されている。

さて今回の調査は、大分土木事務所が実施する上小原地区急傾斜地対策工事に伴い実施したものである。当対策工事は上小原地区の后背、総延長約500mの崖面を対象に、待受擁壁工や法面工を行うもので、平成23年を始りに施工範囲を分轄して、複数回にわたり工事が進められてきた。当対策工事が計画された当初から、大分土木事務所と大分県立埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センターとする）は、事業予定地における埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねてきた。その結果、埋蔵文化財センターは、工事開始から今回の調査着手までに、工事に立ち会うかたちで計4回の遺跡の記録を行い（第2節で詳しく扱う）、工事と埋蔵文化財保護の円滑な調整を行っている。今回、発掘調査を行った範囲（先述した総延長約500mのうち、約60m）は過去の調査事例や報告などによって、古墳時代の横穴墓や中世の竈がある可能性が考えられたことに加え、由布市指定有形文化財「大徳寺の無縫塔」が所在していたことから、大分土木事務所と協議のうえ、工事着工前に本発掘調査を実施する運びとなった。

## 2. 発掘調査の経過

### (1) 過去の調査

埋蔵文化財センターでは今回の調査以前に上小原地区急傾斜地対策工事に伴って、計4回の調査を行っている。本遺跡における調査は今回の調査で一区切りがつくため、ここで一度整理しておきたい。

**平成25年度調査**（原田・松本編 2013『大分県内遺跡発掘調査概報17』）平成25年4月23日および平成25年6月17日の計2日間に実施した調査である。当調査では横穴状遺構が計2基確認された。1号横穴状遺構は高さ70cm、幅80cm、奥行き70cmの長楕円形を呈し、内部には南北朝時代後半から戦国時代前半の無縫塔の塔身が置かれていたという。2号横穴状遺構は高さ200cm、幅240cm、奥行き260cmの長方形を呈し、天井は平天井に近いアーチ形である。また、右側壁には竈が穿たれていた。埋土からは近代の陶磁器片が出土しているが、開削時期に関しては、遺構の状態から近世あるいは中世後半に遡る可能性が指摘されている。

**平成27年度調査**（横澤編 2016『大分県内遺跡発掘調査概報19』）平成27年に実施した調査である。当調査では横穴状遺構が計3基確認された。1号横穴状遺構は高さ180cm（復元）、幅212cm、奥行き152cmの隅丸方形を呈し、開口部の床面には浅い溝状の掘り込みが、奥壁には不整形な掘り込みが見られる。遺物の出土はなく、開削時期は不明である。2号横穴状遺構は民家造成時の削平を受けている。高さ180cm、幅242cm、奥行き170cmの隅丸方形を呈し、右側壁側の床面は一部段状になっている。遺物は出土しなかった。3号横穴状遺構は民家造成時の削平を受けている。高さ165cm、幅172cm、奥行き145cmの方形を呈する。遺物は近世の陶磁器1点が床面の直上から出土した。

**令和元年度調査**（横澤編 2020『大分県内遺跡発掘調査概報23』）令和元年7月11日から令和元年7月25日に実施した調査である。当調査では横穴状遺構が計1基確認された。横穴状遺構は民家造成時の削平を受けており、その残存状況は床面と奥壁をわずかに残す程度である。高さ207cm以上、幅498cm、奥行き200cmの方形を呈し、床面には粗いノミ痕を残す。出土遺物はないが、遺構の規模や構造から古墳時代の横穴墓である可能性は低いとされ、中世以降の信仰に伴う遺構である可能性が指摘されている。

**令和2年度調査**（横澤編 2021『大分県内遺跡発掘調査概報24』）令和2年5月19日および令和2年7月16日の計2日間に実施した調査である。当調査では横穴状遺構1基と祠1基が確認された。横穴状遺構は高さ230cm、幅240cm、奥行き220cmの方形を呈する。出土遺物はないが、農業資材の倉庫として使用されていたため、近代以降の開削である可能性が指摘されている。祠は高さ60cm、幅50cm、奥行き40cmの方形を呈し、床面には神体を置くための台石が据えられている。祠の前面上には2段の階段が削り出されている。

## (2) 今回の調査

今回の調査は大分土木事務所から依頼を受けた大分県立埋蔵文化財センターが、令和3年9月7日から令和3年10月22日に実施した。調査対象は臨濟宗寺院大應寺本堂の東側（区域1）および西側（区域2）の2地点である。

区域1の崖面には石塔を納めた龕が複数確認されており、その中には由布市指定有形文化財である「大應寺の無縫塔」が含まれる。今回の調査では、これら龕の発掘調査および、崖面前面（前庭部）の発掘調査を実施した。なお、区域1では調査前と調査後に写真測量を実施している。

区域2の崖面においても区域1同様、龕が複数確認されているが、今回の調査実施以前に石塔は移動され本堂の南側に集められている状態であった。今回の調査ではこれら龕の発掘調査を実施した。なお、区域2では調査後に写真測量を実施している。

調査の実施にあたり、発掘作業や記録作成などの諸業務は支援業務として株式会社島田組大分営業所へ委託した。

## 3. 調査組織の構成

### (1) 令和3年度 本調査

**調査期間** 令和3年9月7日（火）～令和3年10月22日（金）

**調査主体** 大分県立埋蔵文化財センター

**調査総括** 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター 所長）

**調査員** 小堀嵩史（大分県立埋蔵文化財センター 調査第二課 主事）

**調査支援**（委託）株式会社島田組大分営業所 塩濱浩之 中村寛志

### (2) 令和4年度 資料整理・報告書作成

**整理期間** 令和4年6月1日（水）～令和4年8月31日（水）

**調査主体** 大分県立埋蔵文化財センター

**調査総括** 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター 所長）

**調査員** 小堀嵩史（大分県立埋蔵文化財センター 調査第二課 主事）

**調査業務**（委託）株式会社九州文化財総合研究所 永井美香

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

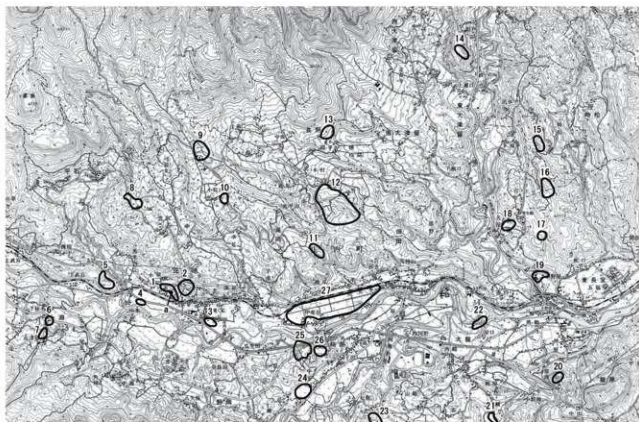
由布市庄内町は大分県の中央部に位置する。町の中心部を一級河川大分川が東流し、河川の流域沿いに狭長な平地が広がる。現在この平地には国道210号やJR久大本線が通り、これらが大一庄内一湯布院をつないでいるように、古来においても人の往来が多い土地であったと考えられる。一方で、町の北側と南側には台地や丘陵、山地が連なる。これらの山々は、大分川を本流とする中・小河川の開析によって分断され、そこには深い谷が形成されている。

今回調査を行った小路遺跡は北側丘陵の麓、露出した凝灰岩の崖面の直下に位置する。

### 2. 歴史的環境 (第1図)

**旧石器時代** 現在より冷涼な気候であった旧石器時代の遺跡として、花牟礼山の北にある上ノ池遺跡がある。この遺跡からは剥片尖頭器が出土している。標高の高い地域ではあるが、旧石器時代から人々の生活があったことを知ることができる。

**縄文時代** 気候が温暖になり土器や弓矢を使い始める縄文時代になると、庄内町でも遺跡が散見されるようになる。縄文時代早期の遺跡としては上ノ池遺跡が知られ、ここからは押型土土器が出土している。また



1. 小路遺跡
  2. 上小原横穴墓
  3. 東家遺跡
  4. 小原氏館跡
  5. 辻の台城跡
  6. 麻生氏館跡
  7. 奈須氏館跡
  8. 神明原遺跡
  9. 小松台遺跡
  10. 水足遺跡
  11. 鳥ヶ鼻城跡 (橋爪城跡)
  12. 竹ノ下遺跡
  13. 横牧遺跡
  14. 松ヶ尾城跡
  15. 時松遺跡
  16. 猪原ノ遺跡
  17. 松郡遺跡
  18. 久保遺跡
  19. 小野屋遺跡
  20. 権現堀城跡
  21. 五ヶ瀬中遺跡
  22. 仲ノ原遺跡
  23. 柳原遺跡
  24. 一法師城跡
  25. 中原遺跡
  26. 船ヶ尾城跡
  27. 甲斐田遺跡
- a. 大悪寺の無銘塔

第1図 小路遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)

柳原遺跡では陥穴3基が確認されており（村上編1994）、当時の狩猟の一端をうかがい知ることができる。縄文時代前期や中期の遺跡は知られていないが、後期になると十合野遺跡において住居と考えられる堅穴遺構に伴って多数の土器片や石鏃、石斧、磨石などが出土している（坂本1994）。また、柳原遺跡では楕円形の堅穴土坑や貯蔵穴が確認されており（村上編1994）、少なくともこの時期までには人々が庄内町に定住するようになったと考えられる。

**弥生時代** 日本列島で本格的に稲作の始まる弥生時代になると、大分川流域では広い平野部をもつ下流域の大分平野に弥生時代前期から中期にかけてのムラが出現する。その代表例として、雄城台遺跡や守岡遺跡（ともに大分市）が知られる。一方で大分川の中流域にあたる庄内町では後期以降に水田を営むムラが出現する。柳原遺跡や三反田遺跡、前田Ⅰ遺跡、前田Ⅲ遺跡がそれにあたり、方形の堅穴住居跡が数軒確認されている。

**古墳時代** 庄内町では柳原遺跡において弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての堅穴住居が2軒確認されている（村上編1994）。また近年の調査では、五ヶ瀬中遺跡から堅穴建物1基確認されており、弥生時代後期終末～古墳時代初頭まで存続したものであると考えられている（土谷編2019）。古墳は小路遺跡が、横穴墓は上小原横穴墓群やまん塚横穴墓群が知られているものの、調査例がないため不明な点が多い。よって当該時期の様相を詳しく述べることはできないが、古墳の存在は庄内町においても地位や権力をもった人物が登場していたことを物語る。

**古代** 『豊後国風土記』や『和名類聚抄』によると庄内町は豊後国、大分郡の中の阿南郷に含まれていたと考えられている（庄内町誌編集委員会編1990）。豊後の国衙・大分郡衙とともに、どこにあったのか不明である。国衙の場合は地名から、大分市の古国府地区ないし花園地区にあったのではないかと推測されているが確証は得られていない（豊田他1997）。大分郡衙については、古国府地区の東方、大分川の対岸に「下郡」の地名があり、有力な候補地である（豊田他1997）。人々はこれらの機関の支配の下、戸籍に登録され、公地公民制によって条里呼称の付された土地とともに把握された。しかしながら、庄内町において条里地割は確認されていないので、人々は谷あいの土地を祖や調などの税を納めるために耕していたと考えられる。

平安時代になると、この地域は豊後武士団の中心的存在として力を持っていた地方豪族である大神氏の影響下にあった。大神氏は豊後一円に一族を土着させ、地域を開発・支配するようになる。庄内町もその支配下にあったとみられる。

**中世** 大友氏が守護職として任命され豊後入りした後、室町時代の15～16世紀には、大友氏の加判衆である大津留氏の松尾城を筆頭に、一法師淡路守の一法師城、橋爪氏の鳥ヶ花城、風早氏の船ヶ尾城、袂間氏の権現城などが庄内町に築かれた。

**近世** 文禄二（1593）年、大友義統が朝鮮出兵中における非違をとがめられ、豊臣秀吉の怒りに触れて豊後国を召し上げられた。これにより、鎌倉時代以来の豊後国における大友氏の支配が終わりを迎えた。以降、庄内町の大半は大分郡に属し、府内藩領としての歴史を歩むことになる。一方、阿蘇野地域は直入・大野郡を支配した岡藩の支配を受けることになる。また、庄内町の中にはその他に、幕府領一村、延岡藩領二村、熊本領二村があった。それぞれの規模には極端な差があるものの、五つの藩領へ分断されて錯綜し、複雑な政治地図を描くこととなった。

## 第3章 遺跡の現状

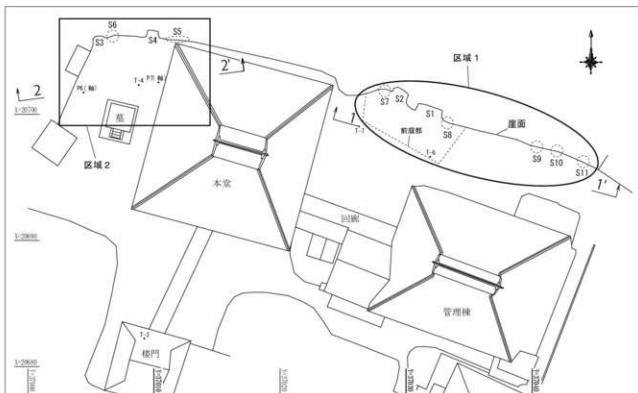
### 1. 小路遺跡の位置

小路遺跡は大分県由布市内町上小原に所在する。そこは大分川左岸の河岸段丘上にあたり、段丘面に展開する上小原集落および段丘崖を中心に南北約200m、東西約250mの範囲が遺跡として周知されている。今回調査を実施した地点は、集落内に寺域を占める臨濟宗寺院大應寺の裏手にあたり、崖面には特に多くの竈や石塔が存在することが知られていた。また、これら石塔群の中には大友八代当主氏時の墓とされる由布市指定有形文化財「大應寺の無縫塔」が含まれており、大分県の歴史をひも解くうえでの史料の価値は非常に高い。

### 2. 遺構分布の特徴（第2図）

第2図は大應寺の平面図である。図中の左右にそれぞれ1棟ずつ、寄棟の屋根をもつ建物があるが、左の建物が大應寺本堂、右の建物が管理棟である。二つの建物は回廊によってつながっている。今回調査した地点は、これら建物の裏手にある崖面である。この崖面は大應寺の東側から管理棟・本堂の裏手（北側）をとおり、本堂を過ぎたところで角度をかえ、西へ抜けていく。崖面は垂直にそびえ、崖上には竹林が繁茂する。

さて、遺構の分布に関してであるが、大應寺の本堂をはさむかたちでそれぞれ東側と西側に竈が分布する点が指摘できる。東側の遺構分布域を区域1、西側の遺構分布域を区域2とする。現地を観察すると、本堂裏手の崖面は大きく削られていることが分かる。確証はないが、おそらく本堂を建てる際の造作と思われる。したがって本堂裏の崖面においても竈が存在していた可能性は捨てきれない。また本堂西側、崖面が南から東へ向きをかえる地点あたりにも自然地形が大きく改変されているようである。



第2図 大應寺平面図 (1/300)

**区域1の現状** (第3図) 区域1は大應寺本堂裏手の東側に所在し、その住所は大分県由布市内町上小原717番地である。

区域1は標高約220.0m～223.0m、広さは南北約4m、東西約20mである。調査開始前、そこには7つの龕と4つの石塔が存在することが知られていた。龕は西からS7・2・1・8・9・10・11があり、S7・2・1・8およびS9・10・11がそれぞれ1つのまとまりをなすように近接して分布する。龕の規模はS2・1が比較的大きく、S7・8・9・10・11は比較的小さい。石塔はこのうちS2に無縫塔1基(石塔1)が、S1内東半部に元禄七銘(1694年)をもつ無縫塔1基(石塔2)とS1内西半部に延享三銘(1746)をもつ無縫塔1基(石塔3)が納められており、宝篋印塔1基(石塔4)がS7の少し南側に納められている。このうち石塔1は「大應寺の無縫塔」として由布市の指定を受けている。また、後述するが石塔2の塔身正面には「當寺中興洞林座元禪師」と刻まれている。この洞林禪師は焼失した寺院を元禄三(1690)年に再建した人物として現在に伝わる。一方、石塔3の塔身正面には「再中興峻法哉和尚禪師」と刻まれている。この峻法哉和尚禪師という人物については、詳細が伝わっていない。しかしながら、「再中興」と冠されている点を鑑みると先述した洞林禪師と同様、寺院を再建するなどの大きな功績をあげた人物である可能性がある。なお、S7・2・1・8の南側はテラス状になっており、周辺より標高が高い。以下、この範囲を前庭部と呼称する。

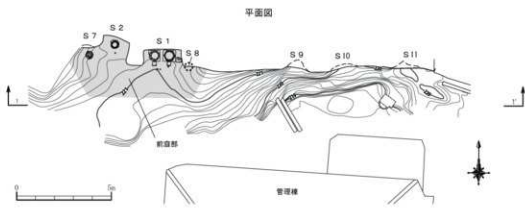
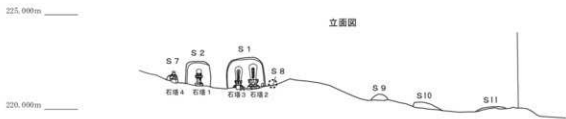
**区域2の現状** (第4図) 区域2は大應寺本堂裏手の西側に所在し、その住所は大分県由布市内町上小原717番地である。

区域2は標高約218.7m～221.7m、広さは南北約6m、東西約15mである。調査開始前、そこには複数の龕が存在することが知られていた。龕は西からS3・6・4・5があり、S3・4・5は標高約220.000mに床面が、S6は標高約221.000mに床面がある。これらの他に、区域2ではS6よりも高位に小型の龕が複数見られたが、高所であるために作業員を動員しての発掘調査が難しく、その調査は写真を撮影するにとどめた。よって発掘調査はS3・6・4・5を対象とした。なお、区域2の発掘調査対象とした龕には石塔が1基も納められていない。これは元来から納められていなかったのではなく、今回の調査に先んじて本堂南側へ移動されたためである。現在、本堂の南側では、区域2から移設、集積された石造物群をみる事ができる。ここでは、元文銘をもつ大乗妙典塔の石材や、歴代住職のお墓と考えられる近世末～現代の無縫塔、地藏菩薩など様々な石造物を確認することができる。繰り返しになるが、これらの石造物は区域2から運ばれてきたものである。

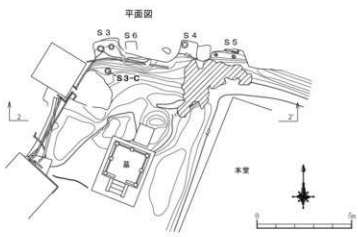
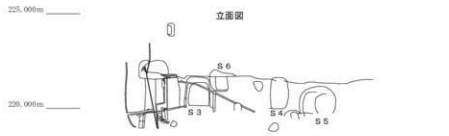
**大應寺について** 今回調査の対象となった龕や石塔群らは、大應寺の活動によって造営され、信仰の対象となり、現在にまで大切に伝えられてきたと考えられる。したがって、大應寺の由緒について『庄内町史』に基づいて一度ここで触れておきたい。

寺院のはじまりについては、延暦23(805)年に菅田百合若麻呂が建立したとの伝承があるが、禪宗寺院としての開基は、暦応元(1338)年に大友氏八代の大友氏時が開いたと伝わっている。開山は信庵正香禪師で、寺伝によると阿南荘小原館城主田代大和守藤原信俊の次男とされている。

天正年間(1573-1592)には兵火にかり焼失したといわれ、寛永11(1634)年には府内藩主である日根野吉明が再建する。しかし、この寺も「自焼二逢テ(『雉城雑誌』)」寺宝等ことごとく焼滅したという。現在の寺は元禄三(1690)年に植田荘光吉村(大分市)吉祥寺洞林和尚が再建したものが基本となっているようである。この人物については先にも触れたが、石塔2の塔身にその名を刻まれた人物である。大應寺の付近には中興洞林和尚に関連する洞林堂という地名も残っている。小規模の改修や増築はその後実施されたようで、昭和の年号と当時の住職の名が刻まれた梵鐘の存在や、本堂の屋根を改修した際の記録などがそれを物語っている。



第3图 区域1测量图 (1/200)



第4图 区域2测量图 (1/200)

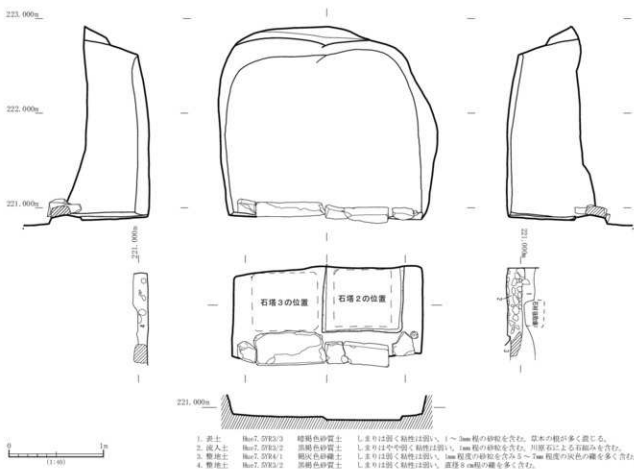
## 第4章 区域1の調査

### 1. 竈の調査

#### (1) S1 (第5図)

竈 S1は区域1の西側辺りに位置し、ほぼ南向きに開口する竈である。調査前、竈の東側半分には石塔2が、西側半分には石塔3が納められていた。竈床面の規模は東壁沿いで奥行0.90m、西側壁沿いで0.82m、幅は入口で1.99m、奥壁沿いで1.98mを測る。床面東半部には奥行0.67m、幅0.85m、竈床面からの深さ0.05m～0.10mを測る方形の掘り込みがある。これは石塔2の建立をより助長するための掘り込みであろう。天井部はやや残存状態が良くないものの、竈床面からの天井までの高さは、約1.88m（復元高）を測る。竈と前庭部とは、掘り残しによる段差および床面前面に並べられた5つの区画石によって明瞭に画されている。区画石の1つには地藏菩薩と思われる図像が陰刻されている（図版2-5）。竈の立面形は中央に最高点をもつアーチ形である。竈の奥壁と天井との境界ラインを注意深く観察すると、東側のラインが西側のラインを切っているようにも見える。これはS1が当初、西側半分ほどの大きさであり、東半分は拡張されたものと考えられる。しかしながら、後述するように、石塔2と石塔3の塔身背面銘を比較すると、石塔3の方が新しい。よって、竈の開削時期と石塔の新旧は対応しないと考えられる。

竈内の堆積土壌は包含される鉱物や色調から比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で4層に分層できた。第1層は竈内部から前庭部にかけて約0.15mの厚さで堆積している。流入土と考える。第2層は竈内部から



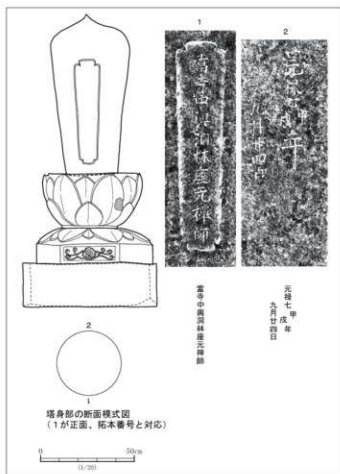
第5図 S1遺構実測図および土層断面図



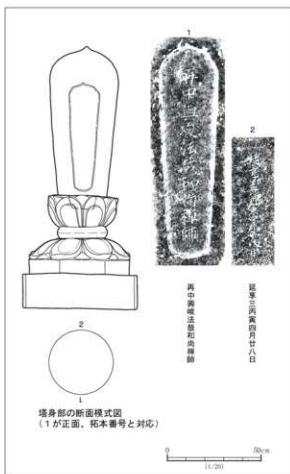
前庭部にかけて約0.10mの厚さで堆積している。本層は龕内部において川原石による石組を包含する。石組は石塔2の建立時に施されたもので、これに崖上からの流入土である第2層が堆積したものと考える。第3層は龕入口から前庭部にかけて約0.15mの厚さで堆積している。第4層は西壁沿いの龕内部にのみ約0.15mの厚さで堆積している。層中には8cm程度の礫が混ざっており、石塔3を固定する目的で施された整地土であると考えられる。

**石塔2** (第6図) S1内東側に建つ無縫塔である。塔身、請花、基礎からなる単制無縫塔で、基礎を2段もつ(下段のものを基礎2とする)。全長は基礎2も含め153.3cmである。請花は上面に直径26cm、深さ0.5cmの柄穴を持つことで塔身を受け、基礎2は上面に1辺30cmの六角形の柄穴を持つことで基礎1を受ける。また基礎1には花唐草文が陽刻されている。銘は塔身の前面(第6図-1)に「當寺中興洞林座元禪師」と刻まれ、背面(第6図-2)に「元禄七甲戌年九月廿四日」と刻まれている。以上を勘案すると、石塔2は洞林禪師供養のために元禄七(1694)年に造られたものであると考えられる。

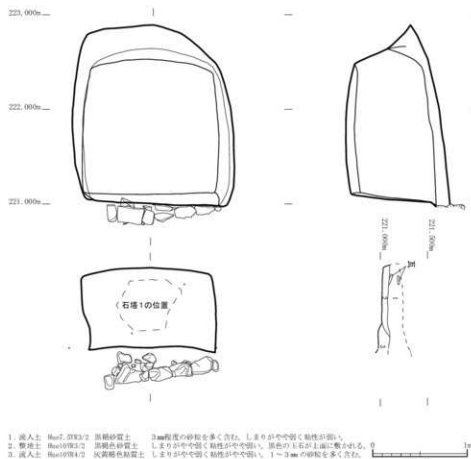
**石塔3** (第7図) S1内西側に建つ無縫塔である。塔身、請花、基礎からなる単制無縫塔で、基礎を2段もつ(下位のを基礎2とする)。全長は基礎2を含め138.0cmである。塔身の下面は直径15.8cm~10.0cm、長さ5.5cmの柄を持つ。請花は上面に塔身下面の柄と同規模の柄穴をもち塔身を受ける。請花の柄穴には厚さ1.0cm程度の粘土が充填されていた。基礎2は上面に1辺22cmの八角形の柄穴を持つことで基礎1を受ける。銘は塔身の前面(第7図-1)に「再中興峻法哉和尚禪師」と刻まれ、背面(第7図-2)に「延享三丙寅四月廿八日」と刻まれている。以上を勘案すると、石塔3は峻法哉和尚禪師供養のために延享三(1746)年に造られたものであると考えられる。



第6図 石塔2実測図



第7図 石塔3実測図



第8図 S2遺構実測図および土層断面図

比較の明瞭な層区分が可能であり、全体で3層に分層できた。第1層は龕内部から前庭部にかけて約0.15cmの厚さで堆積している。この層からは19世紀前半以降に位置付けられる瓦が出土した。流入土と考える。第2層は龕内部に約0.06mの厚さで堆積している。この層の上面には黒色の玉石が丁寧に敷かれ、この直上に石塔1が建てられていた。この玉石は石塔1の直下ほど径の小さなものが密に施され、距離が離れるほど径の大きなものが疎らに施されている。また、層中には塩化ビニール製のパイプが1本、石塔1の下から前庭部へ向けて埋められていた(図版3—4)。以上のことから第2層は現代の整地層であると考える。第3層は龕内部入口辺りから前庭部にかけて約0.1mの厚さで堆積している。元来は龕内部にも堆積していたが、整地に伴って第2層に切られたと考えられる。龕と前庭部とを画する礎群の上に堆積していることから、流入土であると判断される。

**石塔1**(第9図) S2内中央に建つ無縫塔である。塔身、請花、中台、竿、基礎3段(上位のものから基礎1、基礎2、基礎3とする)からなる重制無縫塔で、塔身は高さ46cm、最大径53cmを測る。請花は高さ15cm、最大径59cm(復元)を測る。平面形は円形であり、側面には請花が線刻される。中台は高さ35cm、幅76.5cmを測る。平面形は1辺約28cmの八角形である。中台上面には反花が陽刻され、下面には請花が線刻される。竿は高さ44cm、幅43cmを測る。平面形は1辺19cmの八角形である。基礎1は高さ35cm、幅92cmを測る。上面には反花が陽刻される。側面には1面おきに方形の抉り込みが施され、脚を形成する。基礎2は高さ18.5cm、幅90cmを測る。平面形は1辺40cmの八角形である。基礎3は高さ16cm、幅141cmを測る。平面形は不整形である。銘は竿の8面のうち第1、2、5、8面に確認できる。第1面には「大輔氏時應安元年」、第2面には「甲戌三月廿一日逝」、第5面には「大應寺殿神州神天祐大居士儀」、第8面には「二豊両肥両筑壺對太守

## (2) S2 (第8図)

龕 S2は区域1の西側辺りに位置し、ほぼ南西に開口する龕である。調査前、龕の中央には石塔1が納められていた。龕床面の規模は右側壁沿いで0.90m、左側壁沿いで0.75m、幅は入り口で1.33m、奥壁沿いで1.38mを測る。天井部はやや残存状態が良くないものの、龕床面から天井までの高さは、約1.60m(復元高)を測る。龕と前庭部とは掘り残しによる段差および床面前面に並べられた礎群によって明瞭に画されている。立面形は隅丸方形である。

龕内の堆積土壌は含まれる鉱物や色調から比

大友八代刑部」と刻まれている。以上を勘案すると、石塔1は大友氏時供養のために應安元（1368）年に造られたものと考えられる。

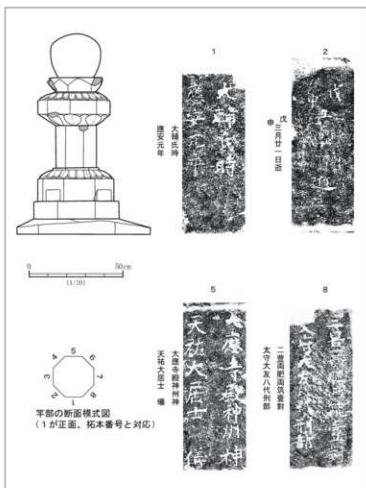
### (3) S7

龕 S7は区域1の西端に位置し、ほぼ南方向に開口する龕である。調査前、龕の前面には石塔4が建てられていた。龕床面から天井部までの高さは約1.3mを測る。立面形は中央に最高点をもつアーチ形である。

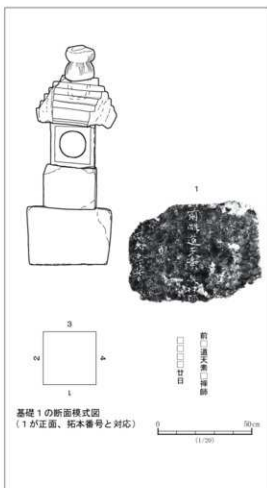
石塔4（第10図） S7前面に建つ宝篋印塔である。相輪、笠、塔身、基礎2段（上位のものから基礎1、基礎2とする）からなる宝篋印塔で、相輪は上部を、笠は隅飾りを大きく欠失する。全長は115.5cm（残存高）である。相輪の下面は直径6cm～9cm、長さ約9cmの柄を持つ。笠は上面に直径11cm～13cm、長さ約10cmの柄穴を持ち、相輪の柄を受ける。塔身の四面中央にはそれぞれ1つずつ月輪が陽刻されている。銘は摩耗が激しく、判読が容易でない。基礎1正面に「前口道天素口禅師」、「□□廿日」と刻まれているようである。

### (4) S8

龕 S8はS1の東側に位置し、ほぼ南方向に開口する龕である。龕の立面形は中央に最高点を持つアーチ形である。発掘調査の結果、龕のすぐ南側から、石塔の基礎と考えられる石材が出土した。種類は不明であるが、本来はS8においても石塔が建立されていた可能性が考えられる。



第9図 石塔1実測図



第10図 石塔4実測図

(5) S9 (第12図)

S9は区域1の東側辺りに位置し、ほぼ南方向に開口する横穴である。横穴の規模は床面の幅1.10m、倉床面から天井までの高さは入口付近で0.70mを測る。

横穴内部の土壌は流入土の1層のみが約0.35mの厚さで堆積しており、この中からは現代の遺物であるコンクリートブロック片や七輪片が出土した。

(6) S10 (第13図)

S10は区域1の東側辺りに位置し、ほぼ南方向に開口する横穴である。横穴の規模は床面の幅0.90m、倉床面から天井までの高さは入口付近で0.47mを測る。

横穴内部の堆積土壌は包含される鉱物や色調から比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で3層に分層できた。第1層は奥壁から入口にかけて約0.05mの厚さで堆積している。表土である。第2層は奥壁から入口にかけて約0.20mの厚さで堆積している。流入土であると考え。第3層は奥壁から入口にかけて約0.05mの厚さで堆積している。流入土であると考え。

横穴の形状がやや不整形である点、壁面の調整が粗雑である点、規模が小さい点、土層の堆積状況などからS10は現代の倉庫であった可能性が高いと考え、半裁したのちに埋め戻した。遺物は出土しなかった。

(7) S11 (第14図)

S11は区域1の東端辺りに位置し、ほぼ南方向に開口する横穴である。掘削途中で多量に湧水したため写真撮影のみを実施し、即埋め戻しを行った。S11は遺構ではなく、自然地形である可能性も考えられる。



第11図 S9・S10・S11の現状(南西から)



第12図 S9完掘状況



第13図 S10半裁状況



第14図 S11半裁状況

## 2. 前底部の調査

### (1) 調査区の設定 (第15図)

竈に付随する遺構・遺物の検出を目的として、前底部に南北約2.5m、東西約6mの調査区を設定した。調査区が狭長で重機を使用することが困難であったため、地表面～最も新しいと思われる整地層上面までの土壌（通常は表土層として扱われる）を、調査区全体にわたって、人力で掘削し、そこを検出面として、土層図面や写真等の記録を作成した。その後、本来であれば前底部全体を基盤に到達するまで掘り下げ、遺構や遺物の有無を確認すべきであるが、遺跡が狭長で廃土を置く場所が確保できなかったため、竈の中心ラインに沿うように4つのトレンチ（以下、それぞれをS7・S2・S1・S8トレンチとする）を設定し、土層の堆積状況を把握するに努めた。

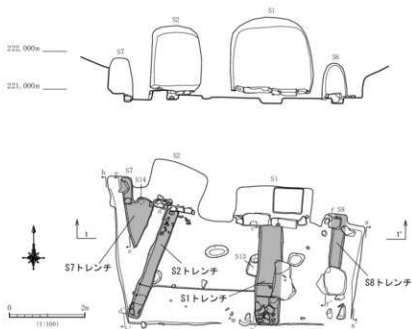
次項以降では、表土層の様相を報告し、続いてトレンチ調査による成果を報告する。トレンチ調査では、2つの遺構を確認した。よって第三には、これら遺構の報告を行う。

### (2) 表土層の様相 (第16図)

調査区の東側で0.1～0.7m、西側で0.1～0.5m掘り下げたところ、整地土と思われる灰褐色砂質土層の上面が検出されたため、そこで掘り下げを中絶した。この層より上位の堆積土壌は包含される鉱物や色調から比較的明瞭な層区分が可能であり、東壁で計4層、西壁で計1層を確認した。東壁の第1層は調査区北側から南側にかけて約0.02～0.25mの厚さで堆積している。表土である。第2層は調査区北側から南側にかけて約0.05mの厚さで堆積している。この層は鉄片やピンの蓋、靴底等が焼けた状態で出土していることから、現代の廃棄行為によって形成された層であると考えられる。第3層は調査区北側から南側にかけて約0.02m～0.2mの厚さで堆積している。流入土と考える。第4層は調査区北側から南側にかけて約0.05～0.15mの厚さで堆積している。流入土と考える。西壁の第1層は調査区北側から南側にかけて約0.1～0.5mの厚さで堆積している。表土層であると考えられる。以上、調査区の東壁では計4層、調査区の西壁では計1層を確認することができた。これら整地層より上位の土層は総じて、崖上からの土砂の流入や現代の廃棄行為によって堆積したものであり、通常は表土として評価される土層である。

### (3) トレンチによる調査 (第17・18図)

**S1トレンチ** S1の中心ラインに沿って、S1の南側に設定した長さ約2.6m、幅約0.7mのトレンチである。基盤である岩盤に到達するまで、トレンチ全体を掘り下げた。堆積土壌は計6層に分層できた。第1層はトレンチ中央から南端にかけて約0.3mの厚さで堆積している。20～30cmの礫を多量に含む。第2・3・5・6層を切る攪乱層である。第2層はトレンチ北端からトレンチ中央にかけて約0.1mの厚さで堆積している。こ



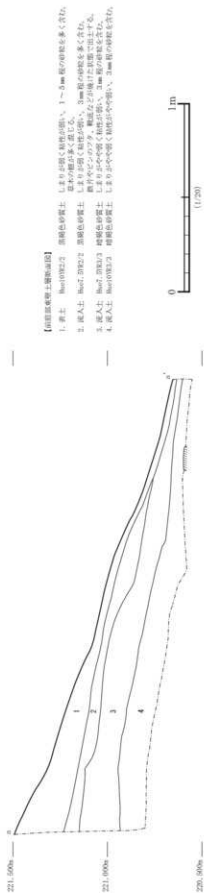
第15図 区域1前底部トレンチ配置図 (1/100)

これは前項において灰褐色砂質土層として報告したもので、整地層と考える。第3層はトレンチ中央において約0.15mの厚さで堆積している。これは後述するが、S13の埋土であり、土瓶が出土している。第4層はトレンチ北端から中央にかけて約0.1mの厚さで堆積している。流入土である。第5層はトレンチ南側から南端にかけて約0.3mの厚さで堆積している。20～50cmの礫を多量に含む。第5・6層を切る攪乱層であると考える。第6層はトレンチ北端から南側にかけて約0.05mの厚さで堆積している。流入土である。基盤である岩盤はトレンチ北端から中央付近まではおおよそ水平であり、トレンチ南側において溝状に落ち込み、トレンチ南端へと至る。溝の幅は下面で約0.25mを測る。S1トレンチ以外のトレンチからこれと同様の溝状遺構は確認されなかったため、東西の長さは不明である。溝の肩は北側で高く、南側で低い。この溝から遺物は出土しなかった。

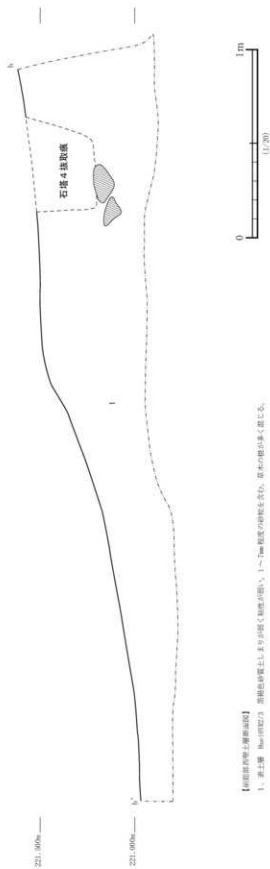
**S2トレンチ** S2の中心ラインに沿って、S2の南側に設定した長さ約3.4m、幅約0.3mのトレンチである。基盤である岩盤に到達するまでトレンチのほぼ全体を掘り下げた。堆積土壌は計5層に分層できた。第1層はトレンチ南側から南端にかけて約0.5mの厚さで堆積している。20～30cmの礫を多量に含む。第3・4・5層を切る攪乱層である。第2層はトレンチ北端から中央にかけて約0.07mの厚さで堆積している。これは前項において灰褐色砂質土層として報告したもので、整地層と考える。第3層はトレンチ北端から南側にかけて約0.15mの厚さで堆積している。流入土である。第4層はトレンチ北端から南側にかけて約0.05mの厚さで堆積している。整地層である。第5層はトレンチ北端から南側にかけて約0.1～0.3mの厚さで堆積している。流入土である。基盤である岩盤はS2床面から約45°の角度でレベルを下げ、トレンチ中央付近で一度水平になり、トレンチ南端に向かって緩やかにレベルを下げる。S1トレンチで見られた溝状の掘り込みは確認できなかった。

**S7トレンチ** S7の中心ラインに沿って、S7の南側に設定したトレンチである。トレンチは当初、長さ約2m、幅約0.3mの長方形であったが、調査の途中、西壁南端を基点に東側へ拡張したため不整形の扇形となった。S7床面付近は基盤である岩盤に到達するまで掘り下げたが、トレンチ全体で基盤層に到達するには至らなかった。堆積土壌は計2層に分層できた。第1層はトレンチ北端から南端にかけて約0.1mの厚さで堆積している。流入土である。第2層はトレンチ北端から南端にかけて最大約0.45mの厚さで堆積している。流入土である。本トレンチにおいては整地層を確認することができなかった。S1西壁以西の範囲は、以东と異なる土壌堆積をしているものと考えられる。

**S8トレンチ** S8の中心ラインに沿って、S8の南側に設定した長さ約2.5m、幅約0.4mのトレンチである。基盤である岩盤まで掘り下げることはできなかった。堆積土壌は計4層に分層できた。第1層はトレンチ北端から南端にかけて約0.15mの厚さで堆積している。流入土である。第2層はトレンチ北端から南端にかけて約0.08mの厚さで堆積している。流入土である。第3層はトレンチ北端から南端にかけて約0.08mの厚さで堆積している。流入土である。第4層はトレンチ北端から南端にかけて堆積している。流入土である。

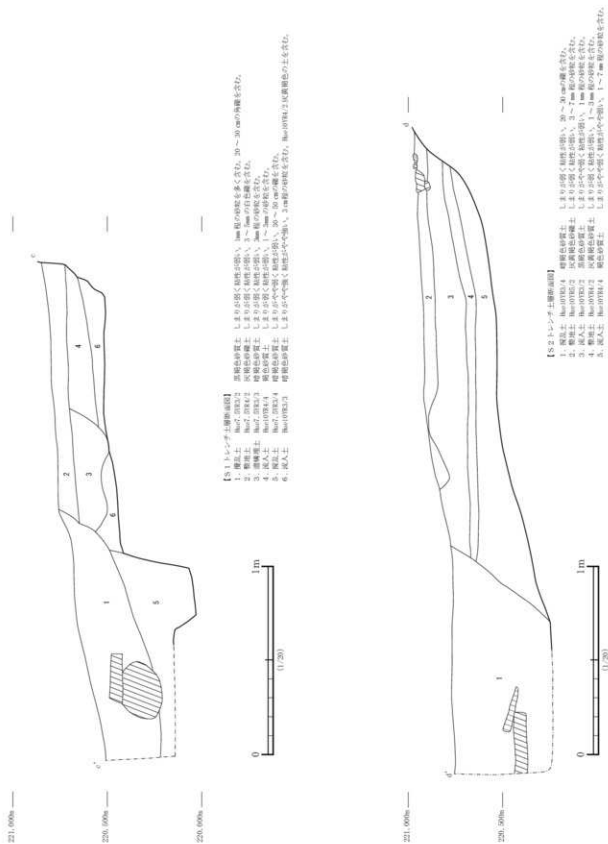


第16図 区域1前庭部東壁土層断面図・西壁土層断面図



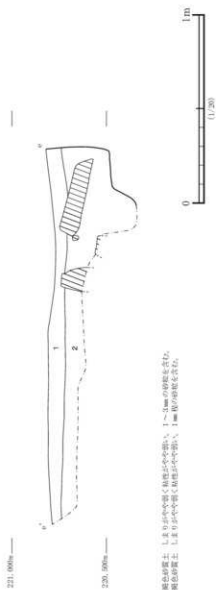
【前庭部西壁土層断面図】

1. 赤土層: He101K2/3 黒褐色砂質土 上より下部へ順次粘りが増し、1～3mm程度の砂粒を多く含む。基土の粗砂が多量に混入し、30cm程度の砂粒を多く含む。

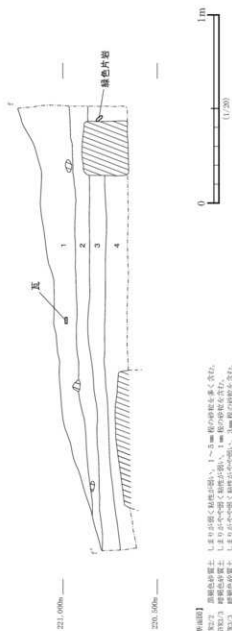


第17図 S1トレンチ・S2トレンチ土層断面図





【S7トレンチ土層断面図】  
 1. 黒土 厚約2.00mの暗褐色の腐植土。1～2mmの腐植を含有。  
 2. 灰土 厚約2.00mの暗褐色の腐植土。1mm程度の腐植を含有。



【S8トレンチ土層断面図】  
 1. 黒土 厚約2.00mの暗褐色の腐植土。1～2mmの腐植を含有。  
 2. 灰土 厚約2.00mの暗褐色の腐植土。1mm程度の腐植を含有。  
 3. 灰土 厚約2.00mの暗褐色の腐植土。1mm程度の腐植を含有。  
 4. 灰土 厚約2.00mの暗褐色の腐植土。1～2mm程度の腐植を含有。  
 5. 瓦 厚約2.00mの暗褐色の腐植土。1～2mm程度の腐植を含有。

第18図 S7トレンチ・S8トレンチ土層断面図

(4) トレンチ調査により検出された遺構の様相

S13 (第19・21図) S13はS1トレンチの掘削中、その西壁面で土瓶を確認したことにより発見した。トレンチ掘りの途中で本遺構の存在を認識したため、その平面形を確認することはできなかった。遺構の底面は標高220.460mにあり、高さは床面から最大で18cmを測る。整地により遺構上部が削りとられた可能性があるため、本来は18cm以上の規模があったものと推測される。遺構からは土瓶1点が出土した。蓋は確認されなかったが、急須内部に土砂がほとんど堆積していなかった。有機物により蓋がなされていた可能性がある。

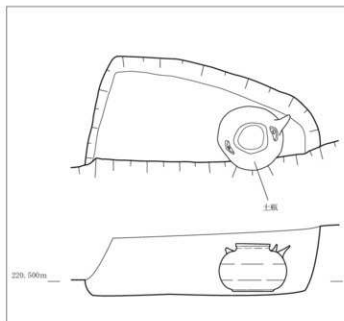
S14 (第20・22図) S14はS7トレンチの掘削中、陶磁器蓋とやかんのセットを確認したことにより発見した。トレンチ掘りの途中で本遺構の存在を認識したため、その平面形を確認することはできなかった。遺構の底面は標高220.830mにあり、遺構上面は蓋の上面である標高220.950mより高位にあったものと推測される。遺構からは陶磁器蓋1点とやかん1点が出土した。陶磁器蓋は、外面を下に向け、やかんへ載せられており、さらに陶磁器蓋の上位には、石材が載せられ封をされていた。やかんの内部からは、何も検出されなかった。



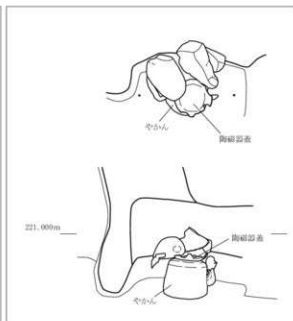
第19図 S13遺物出土状況



第20図 S14遺物出土状況



第21図 S13遺構実測図(1/10)



第22図 S14遺構実測図(1/10)

### 3. 区域1出土遺物（第1～3表）

**S8出土遺物**（第23図） 1はS8とS8前面から出土した石塔基礎とのあいだから出土した砥石と思われる石器である。大きさは、長さ15.1cm、幅5.9cm、厚さ1.0cmで、石材は緑色の結晶片岩である。

**表土層出土遺物**（第24図） 2は表土より出土した平瓦である。上面には丸瓦を載せていたと思われる痕跡がわずかに残る。19世紀前半以降に位置付けられる。

**S7トレンチ出土遺物**（第25・26図） 3はS7トレンチの南側で出土した砥石である。欠失する部分があるが、長さ4.5cm以上、幅4.5cm、厚さ1.9cmの直方体を呈する。上面、下面ともに使用の痕跡が残る。4は棧瓦である。頭の棧側が残存しており、「引合」の刻印が認められる。19世紀前半以降に位置付けられる。5～8は棧瓦である。5・6・7・8に刻印が認められるがいずれも判読できない。これらの棧瓦は19世紀前半以降に位置付けられる。

**S13出土遺物**（第27図） 9はS13から出土した磁器の土瓶である。胴部より上部に軸葉が施されている。19世紀ころに位置付けられる。

**S14出土遺物**（第28図） 10は端反坩の蓋である。口縁部内面には四方禪文が施され、口唇部には口錆も認められる。高台内には異体字が確認できる。11はやかんである。体部および取っ手はともに金属製である。10・11はともに19世紀ころに位置付けられる。

**その他の遺物**（第29図） 12はS9において表面採集した棧瓦である。頭の棧側が残存しており、「引合」の刻印が認められる。19世紀前半以降に位置付けられる。13は前庭部において表面採集した宝篋印塔の笠である。

第1表 区域1出土遺物一覧表（1）

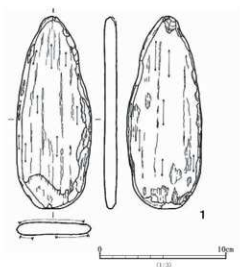
挿図番号	種類	遺構	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
25	3	砥石	S7トレンチ	II層	砂岩	4.5+α	4.5	1.9	58.7
23	1	砥石か	S8		結晶片岩	15.1	5.9	1.0	174.1
29	13	宝篋印塔	表探		凝灰岩	10.5+α	5.0+α	3.8+α	152.6

第2表 区域1出土遺物一覧表（2）

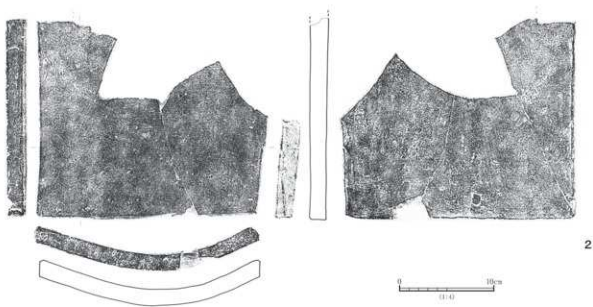
挿図番号	種類	出土地点	法量(cm)			備考	
			長さ	幅	厚さ		
24	2	平瓦	表土	20.2+α	23.1	1.7	
25	4	棧瓦	S7トレンチ	9.0+α	7.2+α	1.4	刻印あり「引合」か
26	5	棧瓦	S7トレンチ	15.5	18.0+α	1.7	刻印あり「？」
26	6	棧瓦	S7トレンチ	19.3+α	8.3+α	1.7	刻印あり「？」
26	7	棧瓦	S7トレンチ	8.0+α	9.6+α	1.5	刻印あり「？」
26	8	棧瓦	S7トレンチ	14.0+α	25.0	1.5	刻印あり「？」
29	12	棧瓦	S9 表探	11.0+α	7.0+α	1.5	刻印あり「引合」

第3表 区域1出土遺物一覧表（3）

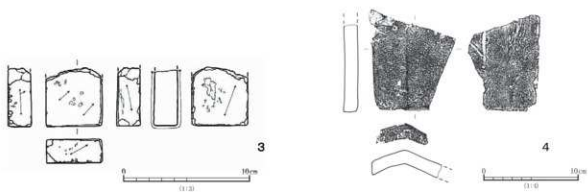
挿図番号	器種	遺構	層位	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴径最大)	厚さ	時期	外面の文様・調整	内面の文様・調整	外面色調	内面色調	備考
27	9	磁器土瓶	S13	9.5	12.9	8.4		19世紀	施釉・露胎	施釉・露胎	青緑	青緑	内面・軸だれ有土器片付着
28	10	磁器 端反坩蓋	S14	9.35	2.9	4.5 (高台径)		19世紀	施釉・染付・露胎	施釉・染付	灰白	灰白	口縁・サビあり 高台内・異体字あり
28	11	やかん	S14		11.0	10.2		19世紀			黒褐色	褐色	外面・黒褐色 内面・鉄分付着



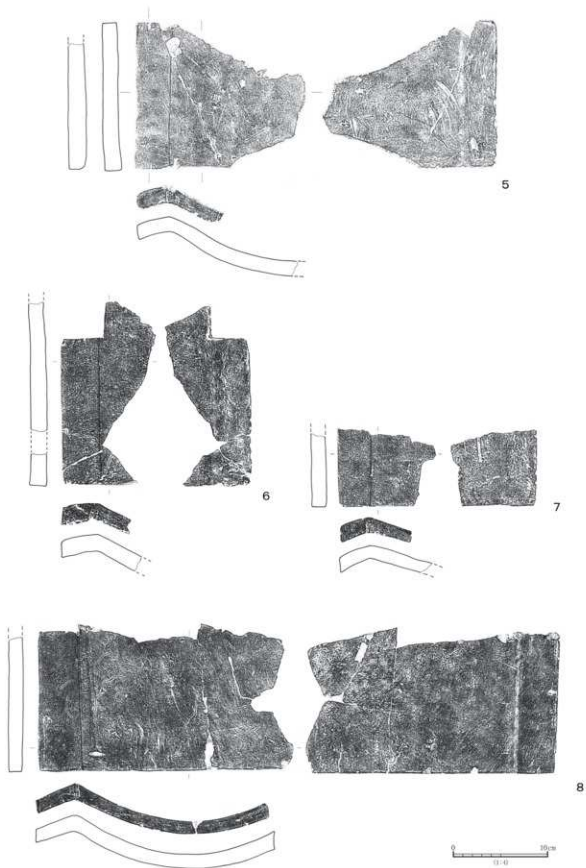
第23図 S8出土遺物



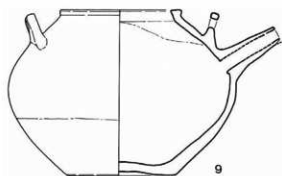
第24図 前庭部表土出土遺物



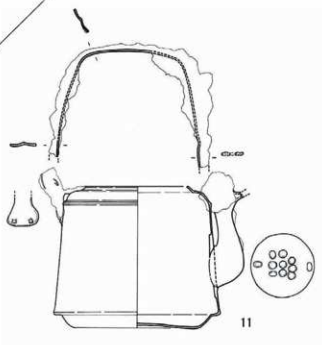
第25図 S7トレンチ出土遺物(1)



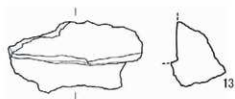
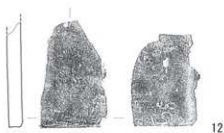
第26図 S7トレンチ出土遺物(2)



第27図 S13出土遺物



第28図 S14出土遺物



第29図 その他の遺物

## 第5章 区域2の調査

### 1. 調査の所見

#### (1) S3 (第30図)

S3は区域2の西側辺りに位置し、南南東方向へ開口する竈である。竈床面は方形を呈し、右側壁沿いで奥行0.96m、左側壁沿いで0.82m、幅は入口で1.37m、奥壁沿いで1.24mを測る。竈の立面形はアーチ形で、床面から天井までの高さは、約1.35m（復元高）を測る。調査開始前から竈床面には隅丸方形の窪みが2箇所（西側のものをS3-A、東側のものをS3-Bとする）、さらにS3の南側にも円形の窪みが1箇所（S3-Cとする）確認されたため、これを遺構と認識しそれぞれ掘削を行った。

**S3-A** S3の床面に掘り込まれた蔵骨器を収納するための埋納穴である。埋納穴の上縁は縦約0.35m、横約0.37mの方形を呈し、深さは約0.35mを測る。埋納穴中には焼骨の入った蔵骨器1点（第33図-15・16）が埋納穴の床面直上に納められていた。

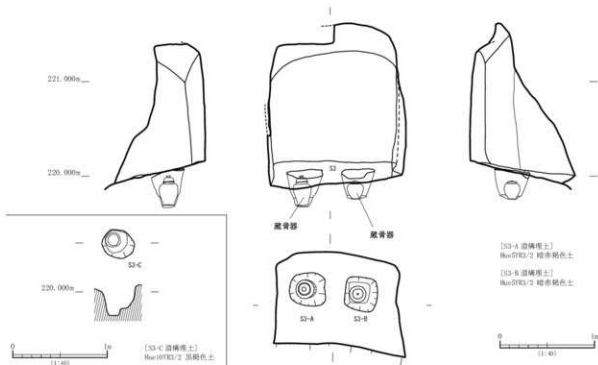
埋納穴中の堆積土壌は流入土の1層のみが約0.35mの厚さで堆積していた。

**S3-B** S3の床面に掘り込まれた蔵骨器を収納するための埋納穴である。埋納穴の上縁は縦約0.35m、横約0.34mの方形を呈し、深さは約0.27mを測る。埋納穴の中には焼骨の入った蔵骨器1点（第33図-17・18）が埋納穴の床面直上に納められていた。

埋納穴中の堆積土壌は流入土の1層のみが約0.27mの厚さで堆積していた。

**S3-C** S3の南側に掘り込まれた埋納穴である。穴の上縁は縦0.30m、横0.34mの楕円形を呈し、深さは約0.32mを測る。

埋納穴中の堆積土壌は流入土の1層のみが約0.30cmの厚さで堆積していた。埋納穴の中からは宝篋印塔の隅飾り片1点（第33図-14）が出土した。



第30図 S3遺構実測図

(2) S4 (第31図)

S4は区域2の中央辺りに位置し、南南西方向へ開口する竈である。竈床面は方形を呈し、その規模は右側壁沿いで0.76m、左側壁沿いで0.82m、幅は入口で0.73m(復元幅)、奥壁沿いで0.68mを測る。竈の立面形はアーチ形で床面から天井までの高さは、約1.51m(復元高)を測る。床面上の堆積土壌はごく薄く表土が堆積するのみであった。表土をを薄く剥いだ際、左奥部に埋納穴が1箇所(S4-Aとする)確認されたため、掘削を行った。

**S4-A** S4の床面に掘り込まれた埋納穴である。埋納穴の上縁は縦約0.36m、横約0.30mの方形を呈し、深さは約0.21mを測る。埋納穴の中からは土壌と混ざった状態で焼骨が多量に出土した(図版7-1)。

(3) S5 (第32図)

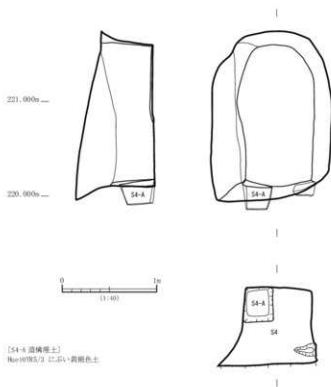
S5は区域2の東側辺りに位置し、ほぼ南方向へ開口する竈である。竈床面は大きさの異なる二つの長方形がそれぞれの短辺同士を結合させたような形を呈する。また、奥壁も床面の二つの長方形と対応するようなかたちで、東側半分がより奥へと掘り込まれている。よってS5はS1と同じように、当初は小さな竈であったが、2次的な造作によってその規模を拡張したと考えられる。竈床面規模は東側の長方形で縦約0.32m、横約0.86mを測り、西側の長方形で縦約0.29m、横約0.77mを測る。竈の立面形はアーチ形で竈床面から天井までの高さは、約1.30mを測る。床面上の堆積土壌はごく薄く表土が堆積するのみであった。表土を薄く剥いだ際、西側に埋納穴が2箇所(西側から順にS5-A、S5-Bとする)東側に埋納穴が1箇所(S5-Cとする)確認されたため、掘削を行った。

**S5-A** S5の床面に掘り込まれた埋納穴である。埋納穴の上縁は縦約0.21m、横約0.23mの方形を呈し、深さは約0.11mを測る。埋納穴の中からは焼骨が出土した。埋納穴の中の堆積土壌は流入土の1層のみが約0.15mの厚さで堆積していた。

**S5-B** S5の床面に掘り込まれた埋納穴である。埋納穴の上縁は縦約0.24m、横約0.24mの隅丸方形

を呈し、深さは約0.10mを測る。埋納穴の中からは焼骨が出土した。埋納穴の中の堆積土壌は流入土の1層のみが約0.12mの厚さで堆積していた。

**S5-C** S5の床面に掘り込まれた埋納穴である。埋納穴の上縁は縦約0.21m、横約0.27mの楕円形を呈し、深さ約0.21mを測る。埋納穴中からは蔵骨器(第33図-19・20)1点出土した。埋納穴中の堆積土壌は流入土の1層のみが約0.25mの厚さで堆積していた。

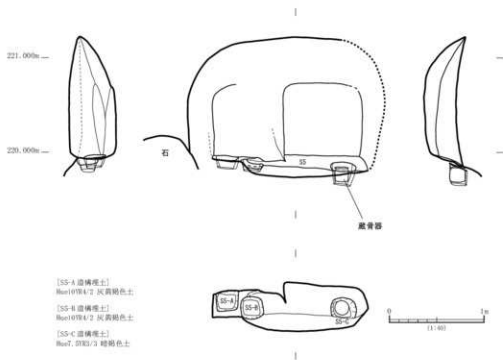


第31図 S4遺構実測図

(4) S6

S6は区域2の西側辺りに位置し、ほぼ南方向へ開口する竈である。竈床面は長方形を呈し、その規模は奥行約0.40m、幅約0.56mである。高さは天井が残存しないため不明。遺物は出土しなかった。





第32図 S5 遺構実測図

第4表 区域2出土遺物一覧表(1)

押図番号	器種	遺構	層位	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	厚さ	時期	外面色調	内面色調	備考
33 15	蔵骨器蓋	S3-A		9.2	7.9			19世紀	白色	白色	
33 16	蔵骨器壺	S3-A		10.4	23.9	10.8		19世紀	白色	白色	焼骨を納める
33 17	蔵骨器蓋	S3-B		8.8	3.3			19世紀	にぶい黄色	浅黄色	
33 18	蔵骨器壺	S3-B		11	16.2	9.0		19世紀	明黄褐色		焼骨を納める
33 19	蔵骨器蓋	S5-C		11.2	2.4			19世紀	灰オリーブ	灰オリーブ	
33 20	蔵骨器壺	S5-C		14.0	13.9	(15.0)		19世紀	灰オリーブ	灰オリーブ	焼骨を納める

第5表 区域2出土遺物一覧表(2)

押図番号	種類	遺構	層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
33 14	宝篋印塔	S3-C		凝灰岩	18.9	15.8	15.3	2620.0	

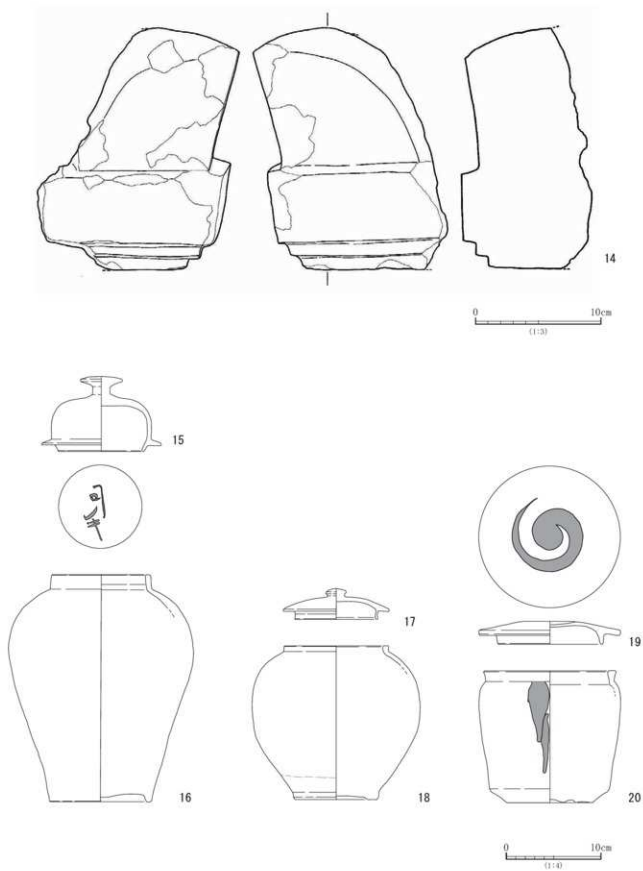
## 2. 区域2出土遺物(第4・5表)

**S3-A出土遺物**(第33図) 15・16はS3の埋納穴から出土した蔵骨器の蓋と壺である。蓋はつまみを有しており、内面には墨書が確認できる。壺内部には焼骨が納められていた。19世紀ころに位置付けられる。

**S3-B出土遺物**(第33図) 17・18はS3の埋納穴から出土した蔵骨器の蓋と壺である。蓋はつまみを有しており、壺内部には焼骨が納められていた。19世紀ころに位置付けられる。

**S3-C出土遺物**(第33図) 14はS3の埋納穴から出土した宝篋印塔の隅飾り片である。縁取り線や戴手文などの装飾は認められないが、形状は非常によく整っている。

**S5-C出土遺物**(第33図) 19・20はS5の埋納穴から出土した蔵骨器の蓋と壺である。蓋外面には反時計回りの巴文が施されている。壺外面にも不定形の文様が施され、内部には焼骨が納められていた。19世紀ころに位置付けられる。



第33図 区域2出土遺物実測図

## 第6章 総括

今回の調査は、大分土木事務所が実施する上小原地区急傾斜地対策工事に伴い実施した。調査地点は、上小原集落に寺域を占める臨濟宗寺院大應寺の裏手にあたる範囲で、大應寺本堂の東側にあたる地点を区域1、西側にあたる地点を区域2とし、両地点において発掘調査および写真測量を実施した。以下、主な調査成果を述べ、総括としたい。

区域1では、竈と前庭部の発掘調査を実施した。S1では、元禄七銘(1694)を持つ石塔2および、延享三銘(1746)をもつ石塔3を確認した。石塔に刻まれた年号と遺構の切り合い関係に矛盾が生じているため、石塔2および石塔3は当初建てられた位置を保っていないものと判断される。S2では、應安元年銘(1368)をもつ石塔1を確認した。発掘調査実施前に石塔1を移動させた後、石塔直下からは黒色の玉石群が検出された。玉石の下位には埋葬主体部が存在する可能性が予想されたため、慎重に掘り進めたが、そこからは塩化ビニールパイプが出土した。よって、S2は、現代に近い時期において、排水を強く意識した整地が実施されたものと考えられる。前庭部の調査では、表土層を人力で掘削し、図面や写真記録を作成後、竈の主軸に沿うかたちで4つのトレンチを設定した。S1トレンチでは、トレンチ南側において基盤である岩盤を成形した溝状遺構が確認されたが、時期や用途を判断するには至らなかった。S2トレンチでは、第3層の流入土をはさむ形で第2層と第4層の整地土を確認した。前庭部において、土砂の流入と整地が繰り返されていたことが分かる。S7トレンチでは、近世瓦がまとまって出土した。これらの中には「引合」の刻印をもつものが一定量含まれる。この「引合」の刻印をもつ瓦は、豊後国海部郡細村において19世紀前半以降に生産された瓦であると考えられている(吉田2017)。豊後府内や竹田城下町で使用された細村産の瓦が、庄内町においても消費されていたことが確認された。S8トレンチでは流入土のみを確認した。S1やS2と異なり、早い時期から整地を中止した可能性がある。

区域2では、竈の発掘調査を実施した。S3では床面に穿たれた3つの埋納穴中から19世紀に位置付けられる蔵骨器2点と宝篋印塔の隅飾り片1点が出土した。S4では床面に穿たれた1つの埋納穴中から焼骨が確認された。S5では床面に穿たれた3つの埋納穴中から焼骨と19世紀に位置付けられる蔵骨器1点が出土した。S3・4・5には石造物が納められていなかったが、現在本堂の南側に集積されている石造物のうちのいくつかがこのS3・4・5に納められていたようである。

今回の調査で出土した遺物の時期や出土量に注目してみると、中世に遡る遺物は石塔1のみであることが分かる。石塔2・3が造られた時期である17~18世紀の遺物は、本堂南側の集積された石造物中に、元文銘をもつ石塔が、区域2において寛口銘をもつ四國遍路供養塔があるなど、少ないながら存在する。19世紀になると、「引合」の刻印をもつ瓦や埋納穴から出土した蔵骨器、石造物など、遺物の量や種類が増える。以上を踏まえると、17世紀以降に竈の掘削や石造物の建立、それに伴う祭祀などが開始され、これらの活動は19世紀ころにピークを迎えたと考えられる。今回の調査以前に実施された計4回の立会調査においても、中世に遡る遺構や遺物は、平成25年度調査の1号横穴状遺構内から出土した南北朝時代後半~戦国時代前半に位置付けられる無縫塔塔身1点のみであり、その他の遺構や遺物は近世以降のものが主であった(第2章第2節)。大友八代当主大友氏時のお墓とされる由布市指定有形文化財「大應寺の無縫塔」が所在することや、寺伝では大應寺が1338年に禅宗寺院として成立したとされることを鑑みると、現在の大應寺周辺において中世段階における遺物や遺構が希薄である点は慮外なことである。一方で寺伝では1634年~1690年のあいだに火災があったことが伝わっている。したがって火災以前の寺院建築は今回調査した地点とは別の場所にあった可能性も考えられよう。この点に関しては周辺における今後の調査事例の蓄積を待ち判断したい。

●参考文献

- 坂本嘉弘編 1994『十合野遺跡』庄内町教育委員会  
庄内町誌編纂委員会編 1990『庄内町誌』庄内町  
土谷崇夫編 2019『五ヶ瀬中遺跡』大分県立埋蔵文化財センター  
豊田寛三 後藤宗俊 飯沼賢司 末廣利人 1997『大分県の歴史』山川出版社  
原田昭一 松本康弘編 2013『大分県内遺跡発掘調査概報17』大分県立埋蔵文化財センター  
村上久和編 1994『柳原遺跡』庄内町教育委員会  
横澤慈編 2021『大分県内遺跡発掘調査概報24』大分県立埋蔵文化財センター  
横澤慈編 2020『大分県内遺跡発掘調査概報23』大分県立埋蔵文化財センター  
横澤慈編 2016『大分県内遺跡発掘調査概報19』大分県立埋蔵文化財センター  
吉田寛 2017「幕末段階における豊後国海部郡細村瓦師の動向～豊後岡藩江戸屋敷に搬入された豊後細村産の近世瓦を中心として～」『幕藩体制下の瓦-近世都市遺跡における生産と流通-』第66回埋蔵文化財研究集会事務局 pp.199-208

## 図 版



由布市指定有形文化財「大應寺の無縫塔」2021/9/29





1 小路遺跡遠景



2 小路遺跡近景



1 区域1透景



2 S1調査前



3 S1調査後



4 S1東壁土層



5 S1区画石に刻まれた図像(地藏菩薩か)





1 S2調査前



2 S2調査後



3 S2西壁土層



4 S2塩化ビニールパイプ出土状況



5 S7調査前



6 石塔4 採取痕



7 S7調査後



8 S8調査後



1 区域1前庭部(調査後)



2 区域1前庭部東壁土層



3 区域1前庭部西壁土層



4 S1トレンチ全景



5 S1トレンチ西壁土層(北半部)



1 S1トレンチ西壁土層（南半部）



2 S1トレンチ溝状遺構（東から）



3 S2トレンチ全景



4 S2トレンチ西壁土層



5 S7トレンチ全景



6 S7トレンチ西壁土層



7 S8トレンチ全景



8 S8トレンチ西壁土層



1 区域2透景



2 S3調査前



3 S3-A(左)・B(右)遺物出土状況



4 S3-C遺物出土状況



5 S4調査前



1 S4-A焼骨出土状況



2 S4-A完掘状況



3 S5調査前



4 S5-A・B焼骨出土状況（竹串の先端に骨片）



5 S5-B遺物出土状況



6 S5-C遺物出土状況



7 区域2 その他石遺物（四圍廻路供養塔）



8 区域2 その他石遺物（五輪塔火輪）



1 第23图-1



2 第24图-2



3 第25图-3



4 第25图-4



5 第26图-5



6 第26图-6



7 第26图-7



8 第26图-8



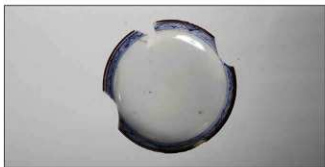
9 第27图-9



10 第28图-10



1 第28图-10



2 第28图-10



3 第28图-11



4 第28图-11



5 第29图-12



6 第29图-13



7 第33图-14



8 第33图-15·16



9 第33图-17·18



10 第33图-19·20





## 報 告 書 抄 録

ふりがな	しょうじいせき							
書名	小路遺跡							
副書名	上小原地区急傾斜地対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一							
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第25集							
編集者名	小堀 嵩史							
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-0152 大分県大分市牧緑町1-61							
発行年月日	令和5(2023)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうじいせき 小路遺跡	おおいでのほくろまふし 大分県由布市 しほりまちとうりやま 庄内町庄内原	442135	213044	33度 11分 9.1秒	131度 23分 49.9秒	20210907 { 20211022	80.5㎡	上小原地区急傾 斜地対策工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
小路遺跡	墳墓	江戸時代～現代		竈	陶磁器 瓦		竈床面において 江戸時代～明治 時代にかけての蔵 骨器が出土した。	

---

---

## 小路遺跡

—上小原地区急傾斜地対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—  
大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第25集

令和5年3月31日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター  
〒870-0152 大分県大分市牧緑町1-61  
TEL.097(552)0077

印刷 株式会社 エポックアート  
〒870-0942 大分県大分市羽田984-1  
TEL.097(569)1181

---

---